魔法少女リリカルなのは ～巻き込まれた男～

白光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～巻き込まれた男～

【Ｎコード】
Ｎ９９１１Ｋ

【作者名】
白光

【あらすじ】
それは平凡とは言えないかもしれない高校２年生の少年に訪れたしょーもない事件。信じたのは自分の心、手にしたものは何もなし。いろいろズレてるこの男が見せるのは喜劇か？悲劇か？はたまた衝撃か！？魔法も超能力も何も持たない一般人な男がリリカルなのはの世界に殴り込み！己の武器は甘いマスクのみ！？紛れ込んだバグ（バカ？）キャラの巻き起こす物語が今、始まる！！

第1話　扉の向こうは…（前書き）

これはオリキャラが主人公の二次創作です。また、作者は原作をアニメでしか見ていないため設定に矛盾が生じたり、また独自の設定をつくる場合があります。それらのことを認められる方のみ読み進めてください。
これが初創作であるため至らない所が多数あると思いますが、精一杯頑張ろうと思いますのでよろしくお願いします。

第1話　扉の向こうは…

とりあえず問いたい。
ここどこ？
目の前にブランコがあるから公園なんだろうけど、問題はどこの公園なのか、だ。

ついさっきまでデパートのトイレにいたはずなんだが…。
確かにトイレの個室から出たら入る前と違った気がしたからおかしいとは思ったけどありえないだろ？
デパートのトイレに入ったら公園のトイレに出ましたってのは。
ドアの向こうは公園のトイレでしたって？千と千尋の〇隠しってか？
まぁ、俺の名前は千川（せんかわ）　智広（ちひろ）だからあながち間違いではないかもしれないけどさ。

なんて現実逃避は終わらせて最初の疑問を本格的に解決しないとな。
誰かに聞けばわかるだろうから外に出るか。でも何て言えばいいんだ？
いきなり「デパートのトイレに入ったらここに着きました」って言ったら怪しまれるだろ。むしろ頭のおかしい人だと思われるな。俺だってそう思うし。いや、道に迷ったって言えばいいのか。それなら怪しくないな。それでいくか。よし、それでいこう。
あっ、そーいや手洗うの忘れたな。ま、別にいいか。それよりも早く人を見つけよう。見つけて一緒にこの怪奇現象を解決しないと。
あれ？なんか間違ってる気がするな。俺は何がしたかったんだっけ？えーっと……
おっ、人間発見！いきなりのエンカウントだな。見たところ小学生だな。でも小学生に聞いてわかんのかな？

てか見ず知らずの小学生に話しかけたら警察呼ばれんじゃね？いや、呼ばれないにしてもなんか危ない気がするからやめとこう。
小学生って響きって危ない感じがするだろ？うんやめよう、他のターゲットを探そう。

ーーーーーードテッ

ん？何の音だ？
あー、こけたのか。
どうすっかな。声かけたほうがいいのか？
泣いてないみたいだけど痛そうだしな。痛いんだろうな。おっ、立った
何事もなかったかのように歩き始めたな。
足引きずってるけど…
はぁ…

「すいません。」
「ん？気にすんなって。まだ痛いんだろ？」
「でも…」「足引きずって歩かせるぐらいなら背負ってくよ。そんなに遠くないんだろ？、お前ん家。まぁ俺が怪しいから嫌だってんなら別だけど」
「そんなことありません！」
「ふーん、なら大人しく背負われてな」
「はい」
今の状況を説明すると、さっきの女の子をおんぶしてる。目的地は

彼女の家。
本当は病院に連れて行こうと思ったんだが、いかんせん場所がわからない。
それに彼女も病院じゃなくて家がいいと言ったんでね。ちなみに女の子の名前は『高町　なのは』、小学三年生らしい

「……」
「あの、名前を聞いてもいいですか？」
「あー、そういや教えてなかったな。俺は千川智広。職業は高校生ってとこだな。」「職業って…。どこの高校に行ってるんですか？」
「秘密だ。」
「え？」
「秘密」
「ぇ…っと、なんでですか？」
「秘密だからだ」
「それは理由になってないような…」
「いいんだよ、秘密なんだから。」
「はぁ…。あっ、ここでいいです。」
「あいよ。翠屋？喫茶店ぽいけど？」
「はい。うち喫茶店やってるんです。」
「ふーん」
「あの、よかったら寄って行きませんか？お礼もしたいですし。」
「気にしなくていいんだけどな。まぁ腹減ってきたし寄って行こうかな」
「はい！」

さて、目的がすりかわった気がするが、とりあえず休憩とするか。

ｓｉｄｅ　なのは

学校の帰り道、私が出会ったのは不思議な人でした。転んで足を怪我した私を家まで送ってくれた優しい人。
ぶっきらぼうで素っ気ない感じがするけど、なぜかそれが心地好い不思議な人。私を背負った温かい背中で、この不思議な気持ちに頬が緩むのがおさえられませんでした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第1話　扉の向こうは…（後書き）

読んでくれてありがとうございます。いかがでしたでしょうか。自分としては皆様が楽しめたのならば何よりです。

第2話　翠屋（前書き）

2話目です。よろしくお願いします。

第2話　翠屋

「いらっしゃいませー……ってなのは！？どうしたの！？」

「あはは、ちょっと足くじいちゃって…。」

「お母さんか？」

「はいそうです。お母さん、こちらは千川智広さん。公園で会って送ってもらったの」

「そうなの。千川さん、ありがとうございます」

「いえいえ。あと智広でいいっすよ。」

「それじゃあ智広さん、智広君のほうがいいかしら？」

「そうっすね。それでお願いします。あと何か頼んでもいいっすか？腹減ったんで」

「どうぞ、何に致しますか？」

「んじゃ、紅茶とショートケーキで」

「はい、かしこまりました。」

「ふー、なかなか美味かったな。紅茶もおかわりしちまったし」
「あの、ここ座ってもいいですか？」
「ん？ああ、いいぞ。てか休まなくていいのか？」
「はい。だいぶ痛みも退いてきたので。千川さん、ありがとうございました」
そう言ったなのはは足に包帯を巻いている。まぁ念のためだろうな。
「いいって。おかげで良い店が見つけられたしな。」
「ありがとうございます」
「そういやこの店女子高生と主婦が多くない？」
「そうですね。うちはケーキとかシュークリームとかに力を入れてるから女性に人気があるんですよ」
「へー。でもケーキが好きなのは女だけじゃないぞ。俺なんかも大好物だし。どっかの漫画の主人公みたく糖尿病も覚悟してるぐらいだしな」
「？」
「今のはスルーしていいぞ」

「はぁ…」

「それより変なこと聞いていいか？」

「？、いいですよ」

「んじゃここは何市？」

「？、海鳴市ですけど…」

海鳴？聞いたことないな。いや、俺が知らないだけかもな。

「ここ、日本だよな？」

「そうですけど…」

「そっか」

よかった。日本なんだな。そりゃそうだよな。日本語通じてるし

「サンキュー。今の質問は特に気にしなくていいからなー。」

「はぁ…」

「んじゃ、そろそろ出るわ。　すいませーん。お会計お願いしまーす。」

「はーい」

「じゃあな、なのは」

よーし、それじゃ帰っかな。ここが日本なら電車に乗ればとりあえず帰れんだろ。この際デパートとか神隠しとかどーでもいい。電車さえわかればな。それも携帯で調べれば…

「圏外!?こんな街中で!?」

いやいやおかしいだろ。街のど真ん中だぞココ。なんで圏外なんだよ。あっ、携帯の調子がが悪いだけか。ご機嫌斜めなんだな。そうに違いない。それ以外ない。ここがおかしいとか俺がおかしいとかあるわけない。ここが俺の知らないとこだとかあるわけない。ここ海鳴市だし。なのはが言ってたし。いやそもそも海鳴市ってどこ?ていうか適当に歩いてたら最初の公園に戻って来ちまった!?マジか?振り出しに戻ったのか?

「……

……ここはどこなんだー！！

誰か教えてくれー！！！」

「教えてあげましょうか？」

第3話　黒幕（前書き）

まさかの連投です。
よろしくお願いします。

第3話　黒幕

「教えてあげましょうか？」

そう言ってきたのは黒い女性だった。髪も黒、服も上着からズボンまで全て黒。しかしなによりもこの女性の持つ雰囲気が暗闇そのもののような黒を連想させた

「あん？」

「知りたいんでしょ？ここがどこだか、何故ここに来たのか。」

そう言いながら女性は近付く。

「ああ、知りたい。けどその前に聞いてもいいか？」

「何を？」

「誰？お前」

「ん～。いきなり答えづらいこと聞くわねぇ」

「答えづらい？」

「ええ。まぁどちらかといえば説明しづらいって言ったほうがいいかも。」

「長いのか？」

「私がここにいて、なぜあなたがここに来たのかも説明するとね」

「なら３０字以内で簡潔に述べろ」

「説明が難しいって言ったでしょ！話聞いてた？」

「聞いてたから言ってんだろ。俺は気が短いんだ。長くてめんどくさい説明なんか聞きたくねえ」

「ずいぶん勝手ね。はぁ、わかったわ。簡潔に述べると私は神様よ」

「へー」

「あら？驚かないの？
ていうか信じるの？」

「ああ、それで？なんで俺はここに来ちまったんだ？」

「意外ね。私の予想では、私のこと頭のおかしい人だと思うはずだったんだけど。あなたは神様を信じてるんだ？」

「あー、なんつーかさ、世の中なんてワケわからんことばっかりだしな、人間が説明できなかったり気づかないだけで不思議な存在ってのも結構あるんじゃないかと思ってるんだ。」

「そうなんだ。で、他に聞きたいことは？」

「んじゃ、どうして俺はここに来たんだ？」

「暇潰しってとこね」

「は？今なんつった？」

「だから暇潰しよ。最近暇で暇でしかたなくてさー。天使供も攻めてこないし。覇権争いも私の圧勝だったし。のんびり過ごすのは嫌いじゃないんだけど刺激が足りないのよねー」

「おい。ってことはお前の暇潰しのために俺はここにいるってことかコラ」

そう言った智広の額には青筋が浮かんでいる

「そうよ。だからいっぱい楽しませてね」

「まかせろ。涙が出るほど楽しませてやるよ。」

「あら嬉しい。何をしてくれるのかしら？」

「テメーのツラに一発いれんだよっ！」

そう言って鋭い踏み込みと共に握りこんだ拳を女子供には向けないようなスピードで振り抜く！

ガツン！！

骨と骨がぶつかり合う音がして、智広の拳が見事に女性の顔面を強

打したことを示した。

だが、

「痛ってーーー！！」

一瞬の後に反応したのは智広のほうだった。智広は目に涙を浮かべて拳を押さえる。

「あら、その顔は面白いわね。涙が出るほどじゃないけど。むしろあなたが涙を流してるじゃない。何がそんなに面白いのかしら？フフッ」

「痛いんだよ、ボケ。涙がでるほどな。」

「涙が出ちゃう、だって死ぬほど痛いんだもん！ってとこ？」

「うるせーぞ石頭。お前ホントに人間か？」

「だから神様だって言ったでしょ。神様は神様でも邪神だけどね」

「邪神？悪魔みたいなもんか？痛ってー」

「そんなもんよ」

「ふーん。んでその邪神様が俺をここに送ったと。あー、痛ってー」

「ええ。そんなに痛い？まあようやく話が進んだからこのまま進めるわよ。」

「すんげー痛い。気に食わないけど進めてくれや」

「まずは、ここは地球なんだけどあなたがいた地球とはまったく別の場所。別の地球。平行世界みたいな感じね」

「ほうほう。んで俺に何をさせるつもりなんだ？」

「話が早いわね。助かるわ」

「刺激が欲しいんだろ。送るだけじゃなくて何かしないと意味ないだろ。どうする、テロでも起こすか？」

「私は邪神だからそれもありだけど今回は違うのよ。」

「ちがう？どういうことだ？」

「あなた、運命って信じる？」

「運命か、考えたことないな」

「そう。まず最初に言っておくけど、私達のような神々でも運命を完全にコントロールすることはできないわ。」

「なら運命なんてないんじゃないか？コントロールできないんなら誰にも決められないってことだろ？つまり決まった定めなんて無いってことだろ？」

「確かにその通りだけど私達が干渉する方法はあるのよ。その方法とは現象や事象の要素に干渉すること。それは人の心だったり、自然の状態だったりね。誰も運命を決められない、むしろ何が起こるか完全には予想できないのなら、それらの周囲の環境をいじって自分の思う未来を創ればいい。周りの環境が事象を引き起こすのならそれらに干渉すればいい。私達は今までそうやって世界に干渉してきたわ。」

「へー」

「あんまりわかってなさそうね」

「いや、わかんないんじゃなくて考えないだけ。面倒くさいし」

「そうね。ならこっちも伝えたいことだけ伝えるわ。まずこの海鳴市で大きな事件が起こるわ。んで私はちょうど退屈してたから干渉することに決めたの。方法は単純、あなたという遥か遠く別世界の人間、完全なイレギュラーを送り込むこと。そしていくつかの助言を与えて事件の中心に送り、ごちゃごちゃにかき混ぜる。私の目的は完全に何が起こるかわからない状態にすること。しかも事件まで時間が無いから誰も介入できない。どう？面白そうでしょ？」

「ああ、あんたの思考回路がイカれてることがよくわかったよ」

「本当はやっちゃいけないことなんだけどね」

「当然だろうな」

「ちなみにあなたが介入しなかった場合の未来ってのもシミュレートできてるのよねー。終わったら見せてあげようか？」

「んなことはいーからちゃんと元の世界に帰してくれんだろーな。」

「もちろんよ。私が楽しめたならすぐにでも」

「か・え・す・よ・な」

「あら、これから知り合うのは美少女ばっかりよ。いいのかしら。後になって帰りたくないって言っても聞かないわよー」

「俺が好きなの美女だから別にいーんだよ」

「まぁいいわ。とりあえず渡しておく物があるわ」

そう言って取り出したのはピンク色の携帯電話だった

「携帯？」

「ただの携帯じゃないわ。私との連絡用で私の魔力で動いてるから電池切れはないわ。あと、ある程度の魔法を無効化することができるわ。発動条件はあなたの意思。」

携帯には豚のストラップが付いていた

「魔法？この地球で？」

そう言いながら智広は豚の顔にデコピンをお見舞いする

「そう。魔法がびゅんびゅん飛び交う事件になるわよ」

「なんか物騒だな。」

「物騒な事件になるわよ」

「そんな物騒な事件に巻き込んどいてくれるモンはそんだけかよ。もっとこう一発で敵をぶっとばせる武器とか無いのかよ」

「あんまり強い力を与えると結果が決まっちゃうじゃない。それじゃあつまんないのよ」

「おいおい、俺は一般人だぜ。そんな物騒な事件じゃ生き残れないだろ」

「そーでもないわよ。さっきのパンチ、一般人の域を軽く超えてたわよ」

「そりゃ向こうの世界でケンカばっかしてたしな」

「ならなんとかなるわよ。むしろなんとかしなさい」

女は顔をにやつかせながらそう言う。だが目だけは有無をいわせな

い強い光を放っていて、女が只者ではないことを表していた

「……はぁ、わーったよ。なんとかやりゃいいんだろ。」

「そうそう頑張りなさい。人の意志ってものは私達ですら、誤魔化して干渉できても根本から変えることはできないんだから」

「へぇ、神様らしくないこと言うんだな」

「私は悪魔だからね」

「そうだったな。そういやさ、名前、教えてくれるか？」

「……ルシファー」

「魔王だったのかよ」

「フフッ」

「んじゃな、ルシファー」

智広はルシファーと名乗った女性からいくつかの助言を受けると公園を後にした。

ｓｉｄｅ　ルシファー

思った通り面白い人間だったわね。ただ少し他の人間と違うかも。すぐに私達の存在を信じたし。良くいえば常識に囚われない、悪くいえばズレてるというところね。けど普通じゃ駄目なのよね、つまらないから。だからこれでいいの。それに頭は悪くなかったしね。おかげで説明は最低限で済んだし。それにちょっとカッコ良かったし。

さてと決まっていた運命をどんなふうにかき混ぜてくれるのかしら。フフッ

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第４話　夜、着信（前書き）

かなり間隔が空いてしまいました（汗）

誤字、脱字などがありましたらご指摘いただけるとありがたいです。

では、お楽しみください。

第４話　夜、着信

あー　すっきりしたー

現在智広がいるのは公園から１０分程の場所にあるアパート。ルシファーとの話が終わったあと彼女から海鳴市の地図とここの鍵をもらった。しばらくこの世界にいるのに家が無いのは辛いだろうとの親切心から用意してくれたらしい。智広はありがたく受け取るとすぐにそこへ向かった。そして今は夕食を終えて風呂から出たところである。

あれ、携帯光ってね？

――て――

なんか聞こえんな

――誰か――――て

は？何て言ってんだ？いやむしろなんで声がすんだ？俺何もいじってないんだけど。部屋に来てから完全に放置してたんだけど。あの魔神（ルシファー）もしばらくは連絡してこないって言ってたし。もしかして緊急

の連絡とかか？

―僕に――力を――て

いや明らかに声ちげーし。てかあいつ僕なんて言わないし！どうなってんだ？

え？通話中？なんだコレ？誰だよ掛けてきたの。何で掛けてくんだよ。なんで番号知ってんだよ。てかこの携帯番号あんの？なんで掛かんの？もしかしてアレなのか？着〇あり的なものなのか？マジなのか？最初の着信が呪いの電話ってどういうことだよ。つーかなに着信してんだよこのピンク携帯。ざけんじゃねーよ。片割れの豚引っこ抜いてやろうか？

「コラ、何とか言えよ。黙ってちゃ「助けて」」

「うおわぁっ！！」

いきなりしゃべんじゃねーよ。ビックリすんだろーが。てかふざけんなよあの悪魔。勝手に人を別世界に送っといて渡した物が呪いのアイテムってどういうことだよ。補助アイテムが呪いの装備ってどんな罠だよ。

「――誰か僕の声を聞いて、力を貸して、魔法の力を――」

ほら魔法とか言っちゃってるし。頭のほうもだいぶ逝っちゃってる

だろ

って魔法？魔法ってアレか？びゅんびゅん飛び交うやつか？そうだとしたら俺にめちゃくちゃ関係あんじゃね？その為に送られてきたんだし。ってことは事件とやらが始まんのか？どうすっかな。つっても行く以外に選択肢は無いわな。あ、でもあいつに今日は外に出るなって言われてたんだっけか。どうすっかなー。いやでも別にあいつの言うことを絶対に聞かなきゃいけないわけじゃないしな。ぶっちゃけ破ってもいいんじゃね？

つーかあんな声聞かされてほっとくとかできないし。それにさっき弁当買いにコンビニ行ったし、もうとっくに破ってるしな。それに今日は外に出るなって言われてもあいつに会ったのが外なんだからこの約束って破綻してないか？あいつの性格も破綻してるけど。

まぁ、ちゃっちゃと行って帰ってくっかな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9911k/

魔法少女リリカルなのは ～巻き込まれた男～

2010年11月14日10時33分発行